FROM United Kingdom

中野香織

㊷シンデレラの姉の毒は下妻で下毒（げどく）

ドーバー越えて

往復連載

齋藤敦子
中野香織

「シンデレラの姉Aが、ラッキーをつかんだシンデレラの姉Bをやっかむ」の法則、なかなかシブい発見でございますぜ、敦子師匠。言われてみれば、イラク人質事件被害者や拉致被害者家族会への理不尽なバッシングにも、この〈シンデレラの姉の論理〉が見え隠れしますね。「たまたま悲劇の主人公として脚光を浴びたからっていい気になるんじゃないよ」っていう。

とげとげしい時代です。カンヌの審査委員たちも世を覆うそんなムードを見抜き、〈姉〉のやっかみの対象になりようのないマイケル・ムーアのドキュメンタリーや14歳の柳楽優弥クンに大きな賞をあげることにしたんでは……と勘ぐりたくなります（なんて勘ぐりじたい、〈姉〉ですが）。

が、そんな空気をすかっと追い払ってくれるような映画に遭遇。敦子さんご推薦の「下妻物語」です。はじめに嶽本野ばらの原作を読んだらこれがもう痛快で、即、翌日映画館へ。ロリータファッションの観客は割引になるとかで会場はフリフリ娘ばっかり、場違いな思いをしましたが、いやあ、上映が始まると冒頭のロココ時代の解説から笑いすぎて涙、こんなにアナーキーで面白さ炸裂の映画は久しぶりで、帰ってもう一度原作を読み返してまた次の日映画館へ！

ヒロイン二人の装いを制服やモードなブランドものじゃなくて、異端で反時代的なロリータとヤンキーにしたっていうのも、そもそもポイント高いですね。異形のものに対しては観客の内なる〈シンデレラの姉〉は機能停止。無茶苦茶なロココ解釈にツッコミを入れるのもばからしく、手放しで拍手するしかないってもんです。

それでカンヌのレッドカーペットに話、飛ぶんですけど（すいません）、赤いドレスでキメた藤原紀香、どうして日本のメディアでもカンヌでもあまり評判にならなかったんでしょう？　ビーズ刺繍アーティストの田川啓二の手になる梅柄ドレスを着こなした藤原紀香はもっと讃えられるべきと思いましたが、なんでもカンヌでは紀香の写真より、勘違いドレスをまとって女優の卵かと揶揄されたいつぞやの中村江里子の写真のほうが（いまだに）売れてるんですってね。ひょっとしてここにも、〈シンデレラの姉〉の論理が働いていない？　異形のドレスで現れた元アナウンサーは場違いすぎて笑えるから許すけど、たかが声の出演なのに優等生的ドレスで国際派女優気取るんじゃないよっていうやっかみ。紀香姐さんにはいつの日か「ワレら、イチビっとったらイテまうぞコラ」と下妻の桃子ばりにシンデレラの姉を蹴散らしてほしいものでございます。

「下妻物語」
シャンテ・シネ、シネクイント
ほかにて上映中

服飾史家である中野香織さんと、映画評論家で字幕翻訳家の齋藤敦子さんの往復書簡的コラム。ファッション誌の映画コラムニストとフランス映画社宣伝部員として出会った中野さんと齋藤さんは、以来十数年、友情を育む。この連載では、イギリス文化とフランス映画という専門分野をベースに映画談義が交わされる。

オブジェ制作＝井上陽子